

共同研究の経過と概要

平川 南

【目的】

古代以来、現代に至るまで各時代に、それぞれ特色ある日本的な都市が各地に出現してきた。その都市形成過程と、都市は人間・情報・物資・技術等が集中する場であるので、それらの交流空間に視点を置いて特質を明らかにする必要がある。本研究ではこれまでの都市の共同研究第1期～第3期を通じて大きな課題として残された次の3点に重点を置いて研究を推進し、日本における都市の形成および都市生活の特色を明らかにする。

- (1)古代都市と中世都市、中世都市と近世都市のごとく都市の移行過程を明らかにすること。
- (2)自然環境との関わりと交通・広場・祭祀・技術等の都市の多面的構成要素について検証すること。
- (3)村落や諸外国の都市との比較検討。

【組織】

氏 名	所 属 機 関	役 割 分 担
鬼頭 清明	東洋大学文学部	研究代表者・古代都市史
前川 要	富山大学人文学部	考古学
義江 彰夫	東京大学教養学部	古代・中世都市史
斉藤 利男	弘前大学教育学部	〃
笹本 正治	信州大学人文学部（客員）	中世・近世都市史
吉田 伸之	東京大学文学部	〃
高橋 康夫	京都大学工学部	建築史
愛宕 元	京都大学総合人間学部	東洋史
加藤 晃規	大阪大学工学部	環境工学
辻 誠一郎	大阪市立大学理学部	古環境学
森栗 茂一	大阪外国語大学外国語学部（客員）	都市民俗学
岩本 由輝	東北学院大学経済学部	近世都市史
西沢 奈津子	お茶の水女子大学文教育学部	古代史
阿部 義平	歴博考古研究部	考古学
小野 正敏	〃	〃
高橋 照彦	〃	〃
平川 南	歴博歴史研究部	古代史
山本 光正	〃	近世史
仁藤 敦史	〃	古代史
福田 アジオ	歴博民俗研究部	民俗学
小林 忠雄	〃	〃
計 21名	(内部 8名・外部 13名)	

[所属名は1994年度現在]

[ゲスト・スピーカー]

浅野 充
高橋 昌明 滋賀大学
馬淵 和男 鎌倉市教育委員会
塚田 孝 大阪市立大学
松本 四郎 都留文科大学

1993年度

[経過]

各回の研究会では、原則として共同研究員は従来の国立歴史民俗博物館における都市研究の課題について積極的に論究し、外部報告者は本館の都市研究において欠落していた新たな視点からの問題の提示を行った。

- 第1回研究会 1993年5月28日 国立歴史民俗博物館
共同研究「都市における生活空間の史的研究」の従来の研究経過について
- 第2回研究会 1993年8月30日 国立歴史民俗博物館
浅野 充 「古代日本・朝鮮における国家形成と都市」
阿部 義平 「古代の都城制について」
- 第3回研究会 1993年11月15日 国立歴史民俗博物館
仁藤 敦史 「初期平安京の史的意義」
高橋 昌明 「平安京・京都論研究の課題」
- 第4回研究会 1994年1月27日 国立歴史民俗博物館
齊藤 利男 「移行期の都市—平泉および多賀国府—」
馬淵 和男 「中世都市鎌倉の成立と展開」
- 第5回研究会 1994年3月25日 国立歴史民俗博物館
高橋 康夫 「平安京から中世京都の都市計画」
討論 「古代都市から中世都市へ」

[成果]

- 1 都市論へのアプローチ
- 2 古代都市の成立と展開
- 3 古代都市から中世都市への移行

上記の1993年度の研究計画をほぼ予定どおり討議することができた。その討議のなかで、

(1)当初課題として掲げた3テーマ

- ①都市の移行過程
- ②自然環境との関わりと交通・祭祀・技術等の都市の多面的構成要素
- ③村落と諸外国の都市との比較

は、密接に関連させて論ずる必要がある。

(2)都市と環境のテーマは都市研究の画期的出発点となる。

(3)都市研究は都市と農村のネットワークのなかで考えるべきであるなど、これまでの本館における都市共同研究に欠落している点が改めて指摘され、今後の重要な課題となった。

1994年度

[経過]

各回の研究会では共同研究員は従来の国立歴史民俗博物館における都市研究の課題について積極的に論究し、外部報告者は本館の都市研究において欠落していた新たな視点からの問題の提示を行った。

第1回研究会 1994年6月9日 国立歴史民俗博物館

前川 要 「中世都市空間の類型と変遷」

笹本 正治 「甲斐吉田の町—中世から近世へ」

討論 「中世都市から近世都市へ」

第2回研究会 1994年7月22・23日 国立歴史民俗博物館

※塚田 孝 「近世都市社会と利害集団」

※松本 四郎 「近世中後期における城下町研究の一つの課題」

討論 「近世都市について」

小林 忠雄 「都市の情報と民俗」

討論 「都市民俗について」

第3回研究会 1994年10月3日 国立歴史民俗博物館

※宮田 登 「都市民俗学の現状と課題」

吉田 伸之 「巨大都市・内・諸社会の類型と構造—近世後期の江戸を例として—」

第4回研究会 1994年12月22日 国立歴史民俗博物館

辻 誠一郎 「都市とその周辺環境の復元」

加藤 晃規 「歴史的環境と都市開発—日・伊の比較を通じて—」

第5回研究会 1995年3月30日 国立歴史民俗博物館

※小倉 欣一 「ドイツ中世都市研究の現状」

鬼頭 清明 「日本都市研究の現状」

全体討論

※はゲストスピーカー

[成果]

本研究は国立歴史民俗博物館の基幹研究『都市における生活空間（第3期は交流空間）の史的研究』の研究総括と今後の都市研究の展望を目的とした。当研究会に課せられた答申については、下記の分担にそった形で各テーマごとに見解をまとめ、全体討議を経て当研究会の報告として1994年9月に提出した。

①古代都市の成立と展開

阿部義平・仁藤敦史・高橋照彦

②古代都市から中世都市への移行

義江彰夫・齊藤利男・前川要

③中世都市から近世都市への移行

笹本正治・吉田伸之・小野正敏・岩本由輝

④都市と自然環境

加藤晃規・辻誠一郎

⑤都市と交流空間

福田アジオ・山本光正・西澤奈津子・小林忠雄

⑥総括的研究

鬼頭清明・愛宕元・高橋康夫・平川南

答申「共同研究『都市における生活空間の史的研究』の研究総括と都市研究の展望についての報告」の骨子は次のとおりである。当時の学会において未着手あるいは研究の立ち後れたテーマについて、一定の研究の整理と基礎資料の提示及び研究課題を浮き彫りにさせることができた点、一定の評価はできるであろう。しかし、各テーマ間の相互交流の欠如、長期的な研究計画にもとづくテーマ設定の必要性等が指摘された。さらに、歴博の都市研究は都市空間の生活に関するものであったが、空間を主たるテーマとしてかかげたこともあって、都市に生活していた人々の暮らしの実態へ接近し、その社会的関係を明らかにし、それを相互に時代をこえて比較するという点では大きな弱点をもっていたことは否定できない。

今日における都市化は、一方では農村・山村等の過疎化と並行して進められており、今日に生活する多くの人々にとっても都市問題はきわめて重要な意義をもっている。したがって、都市史の問題は歴博としても今後ともひきつづき行っていく必要がある。

都市史研究の展望としては、第一点はテーマを都市空間から都市生活史へとひろげること、第二点は、その際に都市民がもっている多様なあり方を、居住者相互の人的関係・都市居住者と他の農村等との関係までふみこんで検討する必要がある。具体的には都市史のもっている衣・食・住についての関係、墓・信仰等宗教関係、都市における自然および様々な環境問題、都市と農村とのかかわりなどをあげることができる。研究方法としては具体的なフィールドに即した研究が是非必要である。

(国立歴史民俗博物館歴史研究部)